②講演

# 内から支えた大礼

前宮内庁掌典長　楠本祐一

楠本でございます。今日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

私は上皇陛下がご在位の平成二十六年（二〇一四）から四年ぐらい、掌典長として宮中祭祀をおそばでお仕えさせていただきました。お代替わりを迎えまして、今上陛下のもとで、一連のご即位関係の行事をご奉仕させていただきました。最大の山場が大嘗祭でございましたけれども、その後、令和元年（二〇一九）十二月に退職をさせていただきまして、現在に至っております。

今日は、私からは「内部から支えた大礼」ということで、実際に陛下のおそばで、どのようなことをして差し上げたか。そして、私なりに陛下のおそばで何を考えたか。このようなことを、大礼からしばらくたちましたけれども、皆さんにご紹介をするとともに、私の方から皆さんに、ぜひ考えていただきたいということも含めて、今日はお話を申し上げたいと思っております。

私は掌典長を務めさせていただきましたけれども、特別のお家柄出身ではございません。京都生まれの京都育ちで、実家は四条堀川で呉服屋をしておりました。実家は仏教でございましたが、同志社中学、同志社高校、同志社大学に進みました。

私は当時、ぜひ東京に行きたい、外国に行きたいという希望を強く持っておりまして、外務省の試験を受

けましたら偶然合格をいたしまして、同志社大学を卒業して外務省に入り、いろいろな国へ勤務をいたしました。

これもまた不思議なご縁で、私はそれまで皇室関係はまったくというほどご縁がなかったですけれども、ある日突然、上司から「宮内庁の侍従に行ってくれ」と言われ、御所勤めとなりました。

当時は、いまの上皇さま、上皇后さまが天皇皇后であらせられたときでありますけども、その後お代替わりとなり、上皇陛下のご退位、今上陛下の即位の礼から大嘗祭に至るまで、一連の行事をおそばでお仕えいたしました。

上皇陛下の大嘗祭と今上陛下の大嘗祭の二回務めた関係者はいないということで、いろいろなところから私の意見を聞かれた経緯もあります。

まず、今回のお代替わりですけれども、まったく突然と言いますか、ご承知のとおり、上皇陛下がご退位をされるという事態が飛び込んだわけでございます。

これは、私もおそばに数年間ご一緒におりましたけれども、まさかご退位をご自分からおっしゃるというのは夢にも思わなかったことでございました。

テレビにも上皇さまご自身がお出になって、退位に至った経緯とか、そのお気持ちをお話しになった。これは、皆さんもご存じかと思います。

私もテレビでの上皇さまのお言葉を何度も聞き返しましたけれども、あのお言葉というのは、非常に大きな意味を持っていると思います。お言葉は、国民の一人一人に対して、天皇とはいかにあるべきかという大きな問題を提起されたということだと思います。

上皇さまは、自らが象徴天皇としてあるべき姿を、全身全霊でお示しになってこられた。しかし、私の個人的な感じでございますけれども、やっぱりお年を召してこられると、全身全霊でしたいと思われても、むずかしいという状況が想定されうるのではないでしょうか。

天皇としてのお務めを簡略化する、また、摂政という制度がありますが、代わりの人に任せるというわけにもいかない。

天皇というのは、生涯現役であるとすれば、いつも全身全霊で務めを果たすべきだという、固いご信念のようなものをお持ちだったのではないか。

ですから、天皇としてやるべきお務めに少しでも支障が生じるような場合には、潔く退位をして、次の天皇につなぐべきだというお考えを持っておられたようにも思われる。

そのようなお気持ちを、「日本国憲法」の下ですから、ストレートにおっしゃれない。あのようなかたちで国民に向けておっしゃったのではないかと思います。

私は数年間、上皇陛下のおそばで、特に宮中祭祀という観点からお仕えをしてきたんですけれども、天皇の祈りというのは、たぶん皆さま方はなかなか実感いただけないかと思います。そう簡単なものではないのです。

われわれが祈りと言うと、神社に行って、かしわ手を打って、拝礼をして、商売繁盛、家内安全ということでしょうけれども、天皇の祈りというのは、ご自分のためではないのです。また、皇室のためでもないのです。国のため、民のため、平和のためなんです。

そして、それこそただ頭を下げるのではなくて、全身全霊で神々の前、あるいはご先祖の霊の前にぬかず

かれて、心をこめてお祈りになるということであります。

写真などでご存じと思いますけれども、陛下が三殿に上がられるときは威儀を正されて、黄櫨染御袍という束帯をお召しになります。そして、冠を着けられて、笏をお持ちになって、三殿にそれぞれ拝礼をされるわけです。

私は、陛下の身支度が整った段階でお部屋まで参上して、「お出ましを願います」と申し上げて、陛下がお出でになりますけれども、陛下はご自分のお部屋から出られる、その瞬間からやはりお顔が違うんですね、普段のお顔ではないのです。

これから神々の御前で国、国民のことを祈るんだという決意の現れと言えるのではないでしょうか。そういう思いでずっと廊下を歩まれて、そして、本殿に行くまでの階段を、一歩一歩上がっていかれる。これはなかなか大変なことだと思います。

三殿には外陣と内陣があって、陛下は内陣で御拝をされるんですけれども、内陣は陛下お一人と、おそばに掌典長の二人しかいません。私は一切言葉を発することはありませんから、その場はまさに陛下お一人のお祈りの場ということだと思います。

そして、私がお榊をお渡しして、それを持って陛下がご拝礼をされますけれども、陛下のご拝礼の仕方というのは、両段再拝といいまして、前段、後段、二回ずつで四回、立って座って、立って座って、一番ご丁重な拝礼をされます。重い装束を着けられて、榊を持たれて、そのまますっとお立ち上がりになります。これを四回です。

私も何かにつかまれば何とかできますけれども、とてもできるものではありません。そして、深々と拝礼

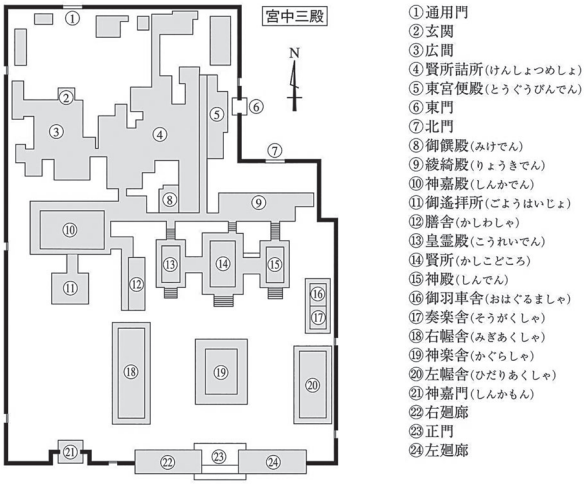


図１　宮中三殿図（皇室事典編集委員会編『皇室事典 令和版』KADOKAWA）

図２　黄櫨染御袍（風俗博物館 HP）

をされます。

宮中祭祀のお祭りも幾つかあるんですけれども、その中で大祭の場合は、陛下ご自身が御告文を奉上されます。お気持ちを込めて奉上されます。このように、宮中祭祀における天皇の祈りというのは並大抵のものではありません。

上皇陛下は天皇の活動の中でも、天皇の祈りを非常に大切にされておられました。これを百％完璧に行うには、ものすごい精神力と、ものすごい体力が要ることを是非申し上げたい。

今回、上皇陛下の退位にあたり、いろいろの儀式、行事に臨まれました。退位については、先例があるにはあるのですが、江戸時代の光格天皇のときに譲位されたという記録がありましたけれども、江戸時代の光格天皇と現在の天皇のお立場というのはまったく違います。

ですから、当時の先例をそのまま踏襲するわけにはいかないということで、象徴天皇の御代のもとでの、退位の礼をどうするか。これは、ある意味ではゼロから宮内庁の中でいろいろ考えて、今回の例ができたわけであります。

上皇陛下が退位されたのが、平成三十一年四月三十日。それに先だって、まず三月上旬に、上皇陛下が三殿に、これから退位するというご報告をされました。また勅使を伊勢の神宮と昭和天皇及び前三代、孝明、明治、大正、それぞれの御陵にお立てになって、退位をされるということをご報告になりました。

四月になって、ご退位近くになりますと、今度は上皇陛下ご自身が、伊勢の神宮に行かれまして、直々に退位のご報告をされました。

四月三十日の、ご退位の当日午前中に、あらためて今日退位されるということを三殿にご報告になって、

同日の夕刻に宮殿で、これは公の儀式ですけれども、退位礼正殿の儀に臨まれたということであります。ご退位については、特に象徴天皇のご退位として、今回新たな例ができたとして今後扱われていくのではないかなと思っております。

五月一日からは、新帝陛下の御代になったわけでございますが、令和の御代のご即位についてのいろいろな儀式をどうするか。宮内庁の中にも大礼委員会というのができまして、宮内庁長官以下、私も毎回出ておりましたけれども、それぞれの部局の進捗状況や、これからのやるべき課題について、会議をいたしました。

そのときに、私が特に申し上げたのは、一点目は、やはり天皇の大礼というのは非常に歴史と伝統があるものですから、ぜひ過去の歴史、伝統をできるだけ尊重するように。かつ、過去の歴史というのは、明治以降だけではなくて、大嘗祭の原型ができたと言われる飛鳥時代の天武天皇のころにさかのぼって大嘗祭、大礼というのはどういうものかということを検討する必要がある。

その中で大事なことは、本質は何か。特に大礼の中で、特に重要とされているものは大嘗祭ですけれども、大嘗祭の本質は稲作の感謝祭なんですね。

これは、稲作技術が大陸から入ってきて、稲作が日本に広まった。ただ、稲作というのは一人ではできないですね。グループでする必要がある。そうすると、リーダーが要りますね。そのリーダーの非常に大事な仕事というのは、当時は天気予報も何もないですから、神々に豊作を祈るということなんです。

祈りの成果があって豊作になったら、まずは神々に対して豊作を感謝する。そして、来年もどうか豊作であるようにという祈りをする。そういう収穫感謝の祈りというのが原点なんですね。

ですから、そういう点を十分に配慮しながら準備をすべきだということは、私は何回も申し上げました。

二点目は、歴史、伝統も非常に大事ですけれども、世の中はいま激しく動いています。時流をしっかりつかんで、守るべきものは守る、変えるべきものは変える。ここはしっかりと陛下をお支えすべきであるということも申し上げました。

三点目は、いま日本の天皇の存在というのは、やはり国民と共にある天皇ですから、国民の納得のいく、国民がなるほど、これが新しい陛下がなさった大嘗祭だという理解が得られるような儀式にすべきである。確かに伝統は大事ですけれども、前のとおりにやっていればいいという話ではないと思うんですね。

また、今回もそうでしたけれども、予算の心配もする必要があります。

どのような内容にするかについても、国民の皆さんの中には、いろいろな考え方がありますから、各人にとって百％結構ですというのは不可能です。ただ、少なくとも一部の方が絶対に反対ということにならないようにと。

そのようなことで、一点目は、伝統とか歴史を大事にすべきである。前例をよく調べ、本質をしっかり押さえるべきである。二点目は、時流を見ながら、変えるべきところは変える、守るべきところは守る。三点目は、大方の国民の賛同を得られるようなものにすべきであるということを申し上げました。

関係者の努力のおかげもあって、令和のご即位の一連の行事も滞りなく終わったことは、私としても非常にうれしく思っております。

その中で特に私の印象に残った儀式について、幾つか申し上げたいと思います。

まず、今上陛下がご即位になってから、初めて宮中三殿に来られるのが期日奉告の儀という、即位の礼及び大嘗祭の期日を三殿に奉告される儀式がありました。

私にとりましては、新帝を三殿にお迎えするのは初めてでありましたけれども、ご奉仕をしまして、感動いたしましたのは、やっぱり新しい陛下のもとでの雰囲気が違うんですね。

ご即位になったばかりですから、新しい陛下がお祈りをされるときには、やはりすがすがしさといいますか、新しい御代が来たという、そういう思いをさせていただきました。

それから、斎田点定の儀というのがありまして、今回は悠紀田は栃木県、主基田は京都府と決まったわけです。準備の過程でいろいろ調べますと、アオウミガメの甲羅を板状に細工いたしまして、それをハハカギという特別のサクラ科の植物であぶって、その甲羅に現れたひび割れを読んで決めると書いてあるんですね。

ですから、これが、令和の御代でできるのかどうかですけれども、関係者は一生懸命いろいろ探してくれまして、アオウミガメの甲羅もあります。ハハカギもありますということですので、それでは、前例どおりやってみましょうということで、ひびの割れ方を見ながら、栃木県と京都府に決まったわけでございます。

これも、何でそんなに面倒なことをするんだということですけれども、新帝陛下の大嘗祭に使うお米をどこで調達するかというのは、非常に重要な話なんですね。

これを、例えば、誰かが決めるということになると、誰が決めるのか問題になりますし、まして、これをくじで決めるというのは、あまりにも安易過ぎるのではないか。やっぱり一番いい決め方というか、特別の、伝統に従った方法で決めるのが一番適当ではないかと思われます。

斎田点定の儀にあたっては、儀式の前に三殿の一つの神殿で、これから斎田点定の儀をいたします。どうかご神意をお示しくださいという祭事をします。それを受けて儀式を行うと、ひびという形でご神意が伝わってくる。

これはこれで、やっぱり昔から伝えられてきたものの決め方というのは、なるほどこういうふうに万人が納得できるような決め方もあるんだなという感じがいたしました。

もう一点ですけれども、大嘗祭のときに大嘗宮をどうつくるかで、いろいろな問題、いろいろな議論がありました。われわれ掌典職が申し上げたのは、前例とか伝統は非常に大事で、守るべきものは守る必要はあるけれども、他方でやはり世の中の動きというのはあるんだし、特に、やはり予算というのは非常に重要な要素であって、お金を惜しまずにやれというような時代でもない。

それから、皇室の本旨として、やっぱり質素を旨とすべしというお考えがありますから、できるだけ伝統に従ってやるべきだけれども、やはりそのときの予算、国民の皆さん方の意識といいますか、それも十分勘案してやるべきであると。

そのようなことで、大嘗宮設計の初めの段階から、宮内庁の中の設計関係の部局と掌典職と、非常に詳細な詰めをしました。

例えば、予算を節約するという意味で、材質をどうするかとか、垣の高さをどうするとか。そのようなプロセスの中で、特に掌典職が申し上げたのは、いろいろ変える必要があろうとも、絶対に必要なのは、悠紀殿、主基殿の中で、陛下が心置きなくお祈りをされることを確保することである。また最後まで問題になったのは、悠紀殿、主基殿の屋根をどうするかということでした。

伝統的には萱葺なんですね。ただ萱葺にすると、建設関係をしている部局から、予算が非常に高くなるということと、技術者が少なくなっており、技術的に非常に時間がかかるので、間に合わなくなる可能性もありますと。その他もいろいろな理由を言っていました。

最終的なタイミングになって、掌典職としては、可能な限り、できれば悠紀殿、主基殿の屋根は萱葺がいいと。ただ、いろいろな考慮要件があろうから、どうしても仕方ないというのだったら板葺でも致し方との対応で、最終的に、今回は板葺になりました。

また、そのとき宮内庁の関係部局に申し上げたのは、今回は板葺になった理由について、関係者に、十分説明してくださいと。なぜ萱葺ができなかったのか。言いましたように、費用の問題とか、技術の問題とか、いろいろ問題がありました。また今回は板葺になったのですが、これからもずっと板葺にするということではなく、今後はまた萱葺からもう一度議論をし始めるということで理解を求めるよう努めてくれと述べました。

そのようなことで、大嘗祭に至るまで、いろいろな議論がありました。

私が今回、一連の準備作業をしていまして、一番印象に残ったのは、今上陛下のご所作であります。陛下は皇太子殿下のころから、毎年、新嘗祭に参列されていまして、ご経験はあるのですが、新嘗祭では神嘉殿という御殿の中で所作をされるのは陛下お一人で、皇太子殿下はご覧になれないのです。

ですから、今回、今上陛下は、陛下として初めて所作をされるということで、私は何回も御所に伺って、ご説明を申し上げました。

陛下は、大嘗祭について非常に勉強をされていました。大嘗祭とは何かとか、御大礼の本質、細部について全てご存じで、ご質問も的を射たものでありました。

細かいご所作については、悠紀殿、主基殿、それぞれ同じ所作をされるんですけれども、大まかに言うと、だいたい神饌のご準備が一時間以上かかります。神饌のご準備といいましても、幾つかの箱に神饌は入って

います。それを一つ一つ箱からお取りになって、柏の葉でできたお皿の上に積んでいかれます。

ただ、ご所作について詳しく、どの箱からどのような順に、何個取るというのは全部決まっています。それを暗いろうそくだけの中で、目を凝らして、一つ一つ取り進めていくんですね。

私も新嘗祭のときにお代役を務めたことがありましたけども、並大抵のことではありません。

また大嘗祭のときも、新嘗祭のときもですが、陛下は御祭服という重い御装束を着けられて、箱に入った細かいご神饌を一つ一つ取る所作をされます。それが一時間近くかかります。疲労というのは、大変なものだと思います。そのようにして国のため、民のために収穫を感謝されるということだと思います。

その後、収穫感謝と来年の豊作をお祈りされる御告文を奉上されます。そして、ご神饌とお神酒を神々と共有されます。

そのような流れですけど、だいたい全体で二時間以上かかります。それを悠紀殿に引き続き、主基殿で同様の祭事があり、すべて終了したのが午前二時ぐらいです。

本日お話しする機会に、陛下がどれだけ精魂を込めて、悠紀殿、主基殿で大嘗祭を務められるか。そのことの重要性というか、強いお覚悟というか、そういうことを皆さん方にお伝えをしたいと思った次第であります。

最後に一言だけ。

私が今回の御大礼を経験させていただいて、おそばで拝見してあらためて思った点は、天皇の存在とは何だろうということです。

私の個人的な考えでは、天皇の存在というのは、まず国のために祈る存在である。民のために祈る存在で

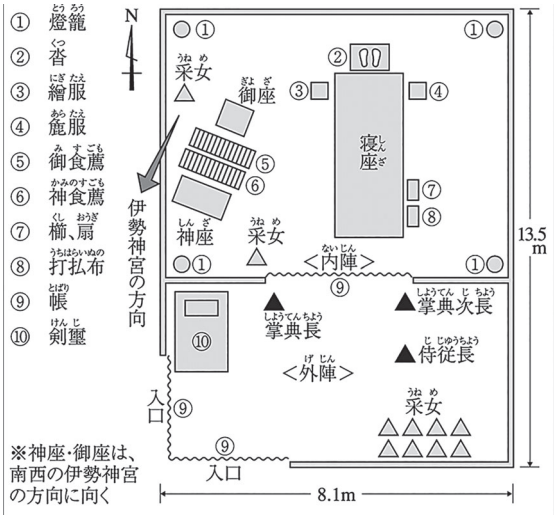


図３　大嘗宮図

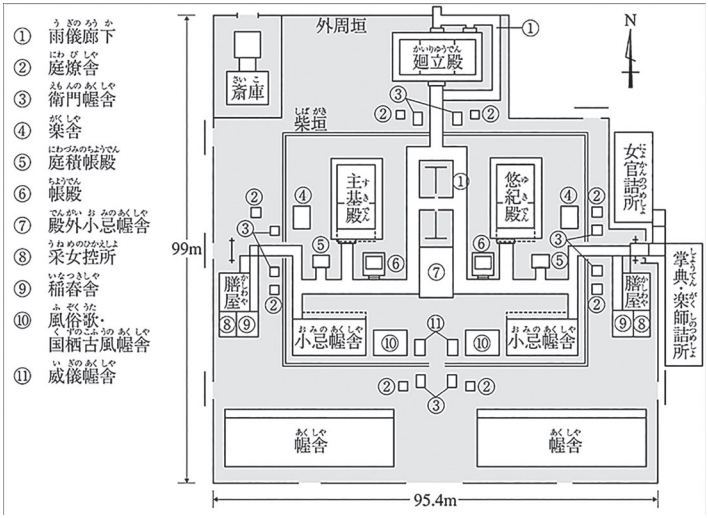


図４　大嘗宮平面図　（皇室事典編集委員会編『皇室事典 令和版』KADOKAWA）

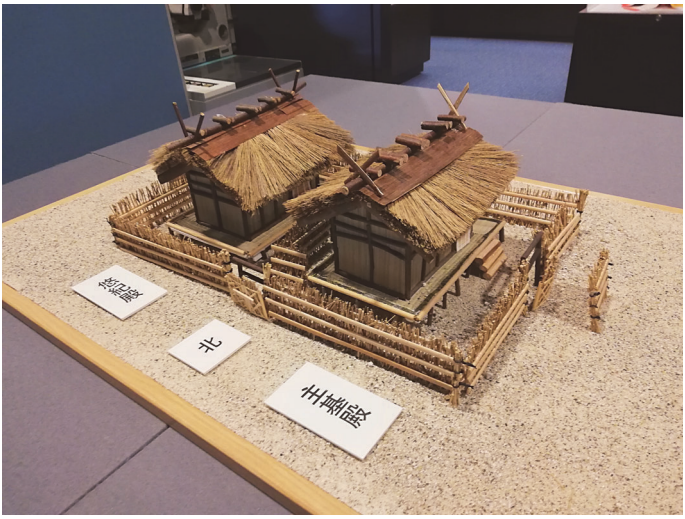


図５　大嘗宮復元模型（京都産業大学ギャラリー蔵）

図６　御祭服（風俗博物館 HP）

ある。平和のために祈る存在である。陛下お一人で、神々の前で、全身全霊で祈られる。このような君主というのは、世界でもおられないのではないかと。外国の君主が教会で一緒にミサに参列されるというのはありますけれども、日本の天皇のようにお一人で重責を担って、神前で、国のため、民のため、平和のためを思いながら、全身全霊で祈念される、このような存在は、日本だけではないかと思われます。

このような天皇のご存在の意義、重要性、重さを、日本の皆さん方のお一人お一人に是非知っていただきたいと思います。

そして、大嘗祭も、日々の祭事もそうですけども、天皇のご存在というのは、日本人が自然と共存して今日まで来たことを表しているのではないか。自然から恵みを受ければ、それに感謝をする。そういう自然との共存のあるべき姿というか、そういうことも天皇のご存在とともに、いろいろな宮中祭祀の儀式の中に流れているのではないかと思っております。

祈る心、自然への感謝というものは、どうも最近、日本人を含めて、世界でも忘れられているのではないでしょうか。そういうこともあって、コロナ禍がはびこり、環境がひどい状況になっているのではないでしょうか。

天皇のご存在、大嘗祭をはじめとする宮中祭祀というのは、過去の伝統であることのみならず、いまわれわれが現在背負っている課題を解決するためのキーといいますか、そういう大切なものを示しているように思われます。

日本人がもう一度振り返って、天皇のご存在の意義とか、日本人が昔から収穫感謝の念を持って自然と共存してきた、そういう気持ちをもう一度思い浮かべる。そういう時期が来ているのではないか。今回、掌典

長としていろいろな大礼関係の儀式に出て、それぞれの儀式の、伝統的な、歴史的な重要性とともに、現代的な課題といいますか、いまの日本人一人一人が考えるべき問題への、非常に重要な鍵が隠されているという感じがいたしました。

私のお話は以上にさせていただきまして、トークセッションで、またお話をさせていただきます。どうもありがとうございました。